

LECTURE

講演会報告



- 文学部英文学科企画運営
第2回文学部講演会
「Visualizing Cultures:
視覚を通してみた歴史」
- マサチューセッツ工科大学教授
宮川繁氏
- 6 / 17 長久手キャンパス

これまで文献資料の分析に重きを置いてきた歴史学に「石を投げるプロジェクト」である「Visualizing Cultures」についてお話しをしていただきました。このプロジェクトは、ピューリッツァー賞を受賞したダワー教授や今回お招きした宮川先生を中心に2002年よりMITではじまっております。

歴史的に貴重な絵画や写真から歴史や文化を分析するという興味深いものです。今回の講演では、黒船来航時の日本の反応、開国後、明治新政府のもとで脱亜入欧を目指す日本の様子などを様々な絵画を使って紹介したり、資生堂の「コマーシャル映像を通じて銀座の発達を知ることが出来る」といったお話がありました。文字では伝わりにくい日本人の深層心理が、視覚を通して見るところもはつきり分かるのかという驚きで会場が包まれました。

さらに、当時のアメリカ人の描いた絵が日本人のイメージとして今なお生き続けているというお話があり、改めて映像の訴える力の強さを感じました。

仕事や社会への理解を深めることを目的としたキャリアデザイン講演会の1回目は、漫画家コンビ、バックンマックンを迎え、会場を笑いの渦に包み込みました。

- 第1回キャリアデザイン講演会
「夢を叶えるコミュニケーション」
- バックンマックン
＜バックン(バトリック・ハーラン氏)・マックン(吉田眞氏)＞
- 5 / 19 星が丘キャンパス

お二人がコミュニケーションで大切にしているのは、「あいさつ」と「話をよく聞くこと」。特に初対面の相手とは、自分のことを話すのではなく相手に質問をすることが、相手と話を進めるコツであると具体的に説明してくださいました。



「マックンにツッコミで叩かれると、カッとなりました」「げんこつで殴り返して来たこともあったね」とマックンさんは苦笑い。体当たりの異文化コミュニケーションを通して絆を深めてきた二人のお話は、生きたコミュニケーションのレッスンとして学生たちにしつかりと届いたようです。



- AS MAP Meet the Famous
「多文化と洗練」
- 音楽監督・演奏家 土取利行氏
- 6 / 25 星が丘キャンパス
- 6 / 26 長久手キャンパス



文部科学省による現代的教養二一ス取組支援プログラムに選定された全学英語教育プログラムAS MAPの特別講演会が行われました。

講師の土取利行氏は、世界的に有名なイギリス出身の演劇家ピーター・ブルックの演劇活動において、音楽監督・演奏

家として活躍する国際的アーティストです。また、古代の音楽についての著書やCDなどが多数ある「縄文の音楽」の研究者でもあります。

今回は、国籍の違う俳優やスタッフとの仕事の経験から、文化的背景の異なる人たちとのコミュニケーションの取り方、固定観念にとらわれず違いの本質を知ることの重要性、違う文化を吸収しながら新しいものを創作していく可能性などについてご講演頂きました。特に、「人間対パソコンなどの機械」の時代において、「人間対人間」という一方通行ではないコミュニケーションが重要であるという具体的な体験談を交えたお話しに、学生たちは大いに刺激を受けました。



ミニ・コンサート

ニー・ゴーノル氏



- AS MAP 特別講演会
「アイルランドのゲール語文学とアイルランド詩人であること」
- 詩人 ヌーラ・ニー・ゴーノル氏
- 5 / 20・21 長久手キャンパス

アイルランドを代表する女性詩人のニー・ゴーノル氏は、ゲールタハト(アイルランド語を日常的に使用する地域)で育ち、1969年に国立コーク大学に入学して英文学とアイルランド語を専攻。これまでに「アイルランド語詩集4冊の他、「アラオの娘」(1990年)など2カ国語詩集4冊を発表、

その後、彼女の詩がいかに世界のアーティストたちにインスピレーションを与えるかの一例として、本学文学部教授 大野光子翻訳「二宮玲子作曲の組曲「イムラム/航海譚」のミニ・コンサートも披露され、原語を交えた朗読 音楽ダンスのコラボレーションを聴衆は堪能しました。

多くの言語に翻訳され、現代最高の詩人として2002年から3年間アイルランド国立3大学の「アイルランド詩教授」を務めました。

講演は、長い歴史を持ち神話や民話の宝庫としても知られるゲール語(アイルランド語)文学の伝統について、また自身の詩がどのようにして生まれ、どのように伝統を書き改めているかを、ニー・ゴーノル氏は熱心に語ってくれました。



- ビジネス学部講演会
「特別会計の埋蔵金の解剖
—社会保障財源は増税なき増収で—」
- 東京大学大学院経済学研究科教授
醍醐聡氏
- 7/2 長久手キャンパス

醍醐氏は、会計学とりわけ公会計の分野の研究において確固たる地歩を占めてこられました。今回の講演会においては、特別会計の領域を市場と国家の視点に基づいて分析、それによって現在の社会保障制度問題を浮き彫りにし、その制度の特徴や機能を包括的に示しながら、とりわけ財源問題の認識の重要性についてお話をされました。

こうした議論のなかで氏が



採用したキーワードは、保険制度をめぐるとの合成の誤謬と介護をめぐるとの合成の誤謬と介

です。かいつまんでいえば、非正規雇用の拡大に伴う企業の保険料負担の節約が長期的に社会保障費の増加になることや療養病床の削減が就労断念者の増加につながることを指摘し、財源確保の手段は埋蔵金の取り崩しによる増収策が妥当であるとしたのであります。

この合理性の側面と不合理性の側面を論理的統計的に結びつけながら帰結をもたらすという論調は、聞くもの心を捉えるところとなり学生も興味深くまじめに拝聴していました。



第3回 米倉五郎氏



第2回 郷式徹氏



第1回 吉崎一人氏



第2回の様子

- ジェンダー・女性学研究所主催
「心理学とジェンダー」連続講座
- ◎ 第1回「脳の働きからみた男と女」
本学コミュニケーション心理学科教授
吉崎一人氏
- 6/19 長久手キャンパス
- ◎ 第2回「社会性の発達と性差」
静岡大学教育学部准教授
郷式徹氏
- 7/2 長久手キャンパス
- ◎ 第3回「思春期と青年期における自己同一性とジェンダーをめぐる葛藤と成長」
本学コミュニケーション心理学科教授
米倉五郎氏
- 7/16 長久手キャンパス

心理学における3領域—認知心理学、発達心理学、臨床心理学—という異なる視点から、性差やジェンダーがどのように理解され関連しているのかを、各講師から研究成果を交えつつ説明していただきました。

◎ 第1回

「脳の働きからみた男と女」
外見上異なる男性と女性は、

言語や記憶、注意などの知的な働きにおいても差異があります。認知心理学、脳神経科学の視点から心の働きの性差について最新の研究成果を踏まえつつ、明解で分かりやすくお話いただきました。学部生を始め大学院生、一般の方など多数の出席があり盛会裏に終了しました。

◎ 第2回

「社会性の発達と性差」

郷式先生からは発達心理学の領域から、対人的な関係性に対する興味や社会性の男女差について自閉症研究の心の理論を紹介いただきました。また、埋没図形テスト、共感指数(EQ)、システム化指数(SQ)などの質問紙法による自己評価の体験学習を活用され、聴講者自身の男女の性差と人格傾向についても具体的にお話を

れました。出席した多くの学生からは、自分の社会的性差と自分のタイプを知り理解を深め、職業選択にも役立てたいとの感想文が寄せられています。

◎ 第3回「思春期と青年期における自己同一性とジェンダーをめぐる葛藤と成長」

個人心理療法、心理査定法、家族療法の観点から、思春期の不登校や家庭内暴力、自傷行動化などの問題行動を示す男女のクライエントたちの自己同一性とジェンダーの葛藤と成長について架空例をまじえてお話がありました。また、青年期で引きこもりや留年、摂食障害などの問題行動を示す男女のクライエントたちの自己同一性の拡散とジェンダーの葛藤と成長についての説明がありました。



- 人権擁護委員会主催
「性同一性障がい理解と対応について」
- 名古屋大学大学院精神健康医学／名古屋大学学生相談総合センター
古橋忠晃氏
- 7/29 星が丘キャンパス



- 文学部国文学科企画・国文学会運営
第3回文学部講演会
「源氏物語と舶来ブランド品」
- 東京学芸大学教授
河添房江氏
- 7/8 長久手キャンパス



講師の河添先生は、日本古典文学が専門で、特に『源氏物語』を中心としたご研究で大変すぐれた業績をあげてい

ます。

今回は、『源氏物語』に登場する舶来ブランド品を手がかりに、「国風文化」の時代における東アジア世界との交流をとらえなおした最新のご研究の一端を、パワーポイントのスライドをまじえてわかりやすくお話いただきました。遣唐使の廃止により国風文化が発達した、という従来の考え方をくつがえすような、大変興味深いお話をうかがうことができました。

高名な先生をお招きしたとあって、外部の方もいらして会場はほぼ満席でした。「源氏物語千年紀」にふさわしい講演会となりました。

身体的な性別と性の自己意識との不一致から起こるGID (Gender Identity Disorder、性同一性障がい)をいかに理解したらよいかをメインテーマとした研修会(主催：人権擁護委員会)が開催されました。約70名の教職員の参加がありました。

古橋先生の講演はその大まかGIDの概念形成およびそれをとりまく今日的な文脈についてのものですが、これは、GIDが「医学」という特定の領域に限定されるべきものではなく、あくまで歴史的・社会的な問題系として存在していること、すなわち私たち自身の問題でもあることを参加者の胸に強く印象づけるものでした。

「他領域とのディスカッションがいまこそ必要」という古橋先生の呼びかけに、参加者の側からも多くの質疑が提出され、熱心な議論が交わられました。「ともに生きる」とはどういうことなのかその困難と大切さを再認識させる、たいへん有意義な90分間でした。